

★事業事例紹介／

(生活改善アプローチによる) 持続的農村開発のための普及員育成研修コース：JICA 筑波から受託 (2023年1月から2月；事後プログラム実施)

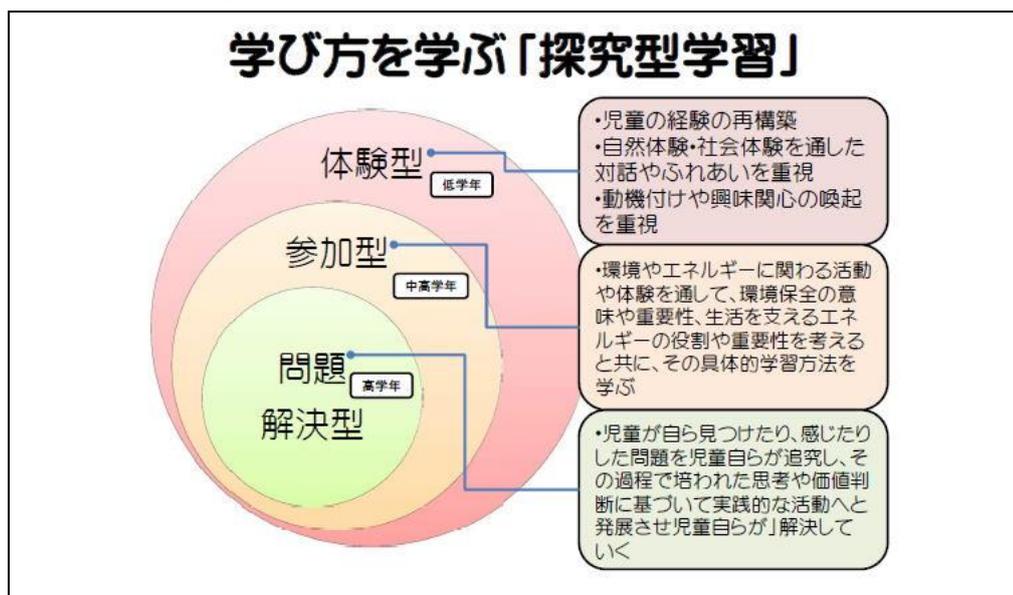
－【副題】 受益者主体の学びとは その2 (前回からの続き) －

以前、弊法人が取り扱う生活改善アプローチを通じた研修の骨子をお伝えさせていただきましたが、実際の研修では、『農民たちそれぞれ自主性を重んじ、彼ら自身が自ら考える、感じる様に、側面からそれとなくその人の気持ちに共感し、彼ら農民たちの思いを話させてあげ、農民本人の意欲、やる気を引き起こすこと』との気づきを得ていただいたようですので、以下に具体的な研修支援に対する反応例を交え、引き続きご紹介させていただきます。

普及員とは、農民にとって適切な技術や情報を提供する一方通行の教える立場であると普段から対応してきた経験がある研修員にとって一方的に教えるばかりでない、自身から喋らずに、相手(農民；住民)の気持ちを察し、自主的にアイデアを捻り出させる様、農民の声に耳を傾け、聞いてあげることの重要性に気づいたことは、嬉しい成果と言えるのではないのでしょうか。

何故ならば、繰り返しになりますますが、例えば、「教える」と言うAからBに情報を与えたことの記憶は、一定の時間を経過すると、忘れる率が多いが、B自身が考える、自分で想像し、行動しながら、気づけるようAは、側面的に手助けすることでは、B自身が能動的に得たものだからこそ、記憶から消えにくい。

であるから、普及員は、様々な思考、工夫を能動的に前に進もうとする住民(農民)が、時に壁にぶち当たるであろう際、一緒になって考え、協力して、道を探ることで、やってみようとする(解決を図ろうとする)農民に学びを与え、自身が考える農民となることを目指させる、そのことが期待されるのでしょうか。



本研修は、そうした気づきによって、研修に参加した普及員自身が育成され、彼らを通じ、地域の農民(住民)に元気や自信をもたせ、地域振興に貢献出来るという展開を期待したい。



研修参加後の活動状況報告（写真上部が on-line 共有参加者）

なお、研修修了、帰国後の各研修員の活動報告・相談に対するフォローアップも継続しているが、その中でも進んでいる取り組み（グッドプラクティス）を例示させていただくことで、研修の成果をイメージしていただきたい。以下、記載例には、うまくいかない反面事例もありますが、そこから次なるステップアップへの学びについても記しております。

（帰国研修員からのチャレンジ状況報告）

起業女性達に特化し、主体性醸成や生活改善の研修を行ってきた。短期集中型の研修にて、収入創出だけでなく、社会心理学も導入し、生活面の充実や個人としての尊厳の重要性を伝えている。エンパワーされた女性達は、自身の考え方や生活の変容が達成された。

地方自治体の政策において計画立案は、集落での参加型計画立案を基盤とすることを基本とした規定化がなされ、継続して参加型現状分析や住民参加の協議がなされている。特に自治体間連合の帰国研修員達は表面的な参加型計画だけに留まらず、住民の主体性醸成に重きを置いて、行政能力向上に EMV※が役立っている。

JICA 事務所と連携のうえ、生活改善フェアを開催し生活改善の考え方や実践事例を一般市民に広報している。

EMV※普及や実践に対する真摯な姿勢や情熱が伺える半面、一部の研修員は例えば住民にワークショップをするときには必ず昼食を用意しなければいけない、あるいは資材援助をした方が活動は活発になる、という固定概念が未だ抜け切れていない。この点チーム内での議論や他機関の関係するスタッフとの協議も随時蓄積されているものの、当該職員自身の長年の習慣や意識を変容するには時間がかかる様である。

※註；EMV = 生活改善アプローチによるエンパワーメント

以上

（文責・事務局 浅野）

#生活改善 #セイカイ #農村開発 #自ら考える